

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520011

研究課題名(和文) 言語における「相互主観性」に関する現象学的、認知言語学的研究

研究課題名(英文) Phenomenological and Cognitive Linguistic Investigation of 'Intersubjectivity' in Language

研究代表者

宮原 勇 (Miyahara, Isamu)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：90182039

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：認知言語学のパイオニアであるラネカー(R. Langacker)による言語におけるsubjectivityとsubjecti-ficationの問題を前置詞alongが登場する文の意味の分析を通じて分析し、最初は空間の運動や移動の具体的表現だったものが、単に認識者であり、発話者である主観の意識の内に内面化され、ある意味では志向性のベクトルへと変化する過程を現象学的に分析した。そして、発話者側でのそのような主観化の働きは、具体的な言語コミュニケーションの場面では、視点の交換の場としての「相互主観性」の領域の成立を前提のしていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We investigated the theory of 'subjectivity' and 'subjectification' developed by one of the pioneers in Cognitive Linguistics, Ronald Langacker putting our focus especially upon the semantical function of "along" in the sentences. Through the investigation concerning such a process of subjectification we could confirm the concrete functioning of such a particle "along". And we could conclude that our mental intentionality is a kind of result of our cognition of 'subjectification'. And furthermore we clarified the following situation; such a subjective activity on the side of speaker presupposes a kind of 'intersubjectivity', on which alone we can exchange our view-points in our ordinary speech or even academic discussion.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：現象学 認知言語学 主観性 主観化 相互主観性 志向性

1. 研究開始当初の背景

研究代表者宮原は平成14年度から16年度にかけて科学研究費補助金を交付され「言語カテゴリーの生成に関する現象学的、認知言語学的研究」を推進してきた。この研究は「認知言語学」と現象学的言語論の統合を目指す試みであり、言語カテゴリー生成の一般理論の構築が目指された。その研究では、<カテゴリー生成の過程にとって具体的な身体的経験が根底において機能し、特に抽象的概念の形成やその理解にはメタファが深く関与している>ことが明らかとなった。に抽象的概念の形成やその理解にはメタファが深く関与している>ことが明らかとなった。この成果を承けて平成18年度から20年度にかけて交付された科学研究費補助金「概念形成へのメタファの関与に関する現象学的、認知言語学的研究—特に哲学の基礎概念を事例として—」では、具体的に基本的な「哲学概念」を事例として、概念形成に際してメタファがどのように関与するかを解明した。各哲学概念の意味内容を最新の認知言語学のアナロジーやメタファに関する理論によって解明し、それぞれの基本的な哲学概念の根底に込められている「根本的経験」の解明をするとともに、最終的にはアナロジーやメタファに関わる人間の根源的認知能力を現象学的観点から解明した。この間、日本での認知言語学研究の第一人者である京都大学山梨正明教授の主催する研究会に参加し、研究成果を発表する機会を得て、認知言語学の最新の問題がどこにあるのかが明らかとなった。また平成21年度から23年度にかけて交付された科学研究費補助金「認知言語学的イメージ・スキーマ理論の現象学的基礎付けの試み」では、認知言語学、とくに認知文法学の第一人者ラネカー(Ronald Langacker)の認知言語学の基礎概念とイメージ・スキーマという視覚的表示方法に関して、現象学の認識論と言語論、とくにフッサールの志向性理論と後期の発生的現象学に見られ

る生成的視点から検討し、その認知言語学の哲学的基礎付けを行った。その成果は2009年度の日本認知言語学会のシンポジウムでの研究代表者宮原の講演「認知言語学の哲学的基礎」とそれを敷衍した論文「認知言語学の哲学的基盤 現象学の立場から」(『日本認知言語学会論文集』、第10巻、p.631-645、2010年)、さらには前述の山梨教授の主催する研究会「京都言語学コロキウム」での発表

「‘Subjectification’ と ‘Intersubjectification’ —認知言語学と現象学の交差するところ(I)—」(2011年)となって、公表された。ここに於いて問題となって現れてきたのは、言語表現、特に知覚野に於ける個体指示において、指示表現の基軸が「主観化」されるという現象の問題である。主観化されても、表現としては主観自体を指す表現は逆に姿を消す。つまり、その言語表現自体を見れば、客観的な描写であるかのようなものが、実態としては主観的描写なのである。申請者の見解では、対象指示に際しては、全く無反省的にただ目の前の現象を素朴に記述する

「自然的描写」と、それを自覚化しつつも敢えて表現しない「主観主義的描写」は区別せねばならない。しかも、自己自身を対象化し、さらには言語化することによって眼前の現象野の内に観察可能な指示物として位置づける「客観主義的描写」が成立しうる。さらには、相手との<視点の交換>という操作によって、「相手側から」指示表現を行うということもありうる。つまり、問題は三つあることになる。(1)全く素朴で自然的な現象記述から「主観的」描写が出てくるプロセス、(2)発話主体が対象化され他の対象と同列に扱われるという「客観的」描写が生ずるプロセス、(3)「主観的」描写を前提にしながらも、<視点の交換>により相手側からの現象記述をするプロセス、それぞれのプロセスの解明が必要となってきた。特に(3)の問題は「あたかも相手の視点にいるかのように」という他者理解の問

題なのであり、deixis という指示詞の使用の問題に留まらず、社会的(phatic)な表現や敬語(honorifics)の問題と関わり、認知言語学では広く「相互主観性」の問題として取り上げられるようになってきている。このように、申請者のこれまでの研究の流れと認知言語学での流れが一致し、本研究の遂行の必要性が生じたと言える。ラネカーを中心とする認知言語学の展開も具体的な発話状況の分析が進むと対人的関係そのものをどのように分析するかという「相互主観性」に係わる問題が重要になってきており、国内外の研究でも相互主観性[ないしは間主観性]をテーマとする研究が増えてきているのが現状である。

2. 研究の目的

本研究は、発話者と聞き手との間の対人的関係に係わる要素である「相互主観性」(intersubjectivity)について、それが言語現象においてどのような機能を果たしているか、申請者たちが従来から統合的に研究してきている現象学と認知言語学の両面から究明することを目的とするものである。相互主観性[あるいは「間主観性」とも訳される]に関する研究はフッサール現象学の重要なテーマとして研究されてきているが、それが近年認知言語学の分野でも重要な概念となりつつある。本研究は、相互主観性の生成と機能を、その根源たる<主観性>にまで辿り、現象学的、認知言語学的視点から究明するものである。

3. 研究の方法

知覚野に出現している個別的な事物をどのように指示するかというgroundingの問題を認知言語学者ラネカーがどのように解明しているかを分析する。その際、「私」「いま」「ここ」といった指示表現の使用や前置詞、移動動詞と副詞などに見られる「主観化」のプロセスを分析し、相互主観性にまつわる問題の分析に移る。そして、指示詞、ないしは指示的表現の使用に於いて<視点の交換>という現象は具体的にはどのように起きるのか、具体的事例を複数言語において収集し、分析す

る。以上の作業を基礎にしてフッサールの現象学的言語論に於ける指示詞の理論と相互主観性の理論を検討する。実際には、Langacker、Traugott、Herbert H. Clark などの論文、著書の分析、認知言語学関係の研究会での発表、研究会の開催、そして相互主観性に関する Husserlの著作Husserliana、Bd.XIII、XIV、XVの分析を認知言語学の知見を援用しながら行う。

4. 研究成果

フッサールの『デカルト的省察』の第5省察「モノイド論的相互主観性としての超越論的存在領野の解明」の分析を行い、そこでの他者認識の理論には「第一次的領域」といういわば身体的領域、メルロ=ポンティの用語では「肉」(la chair)の次元が根底にあることを確認し、そのような仮定が単なる自然主義的な素朴性とどのような点で違うのかを検討し、問題点を抽出した。その際に「ここ」と「そこ」の交換という視点の交換の意識が重要であるという点に着目し、そのことが言語現象においてどのような表現として現れるかを認知言語学の文献を参考にして分析した。そして、それとの関連で認知言語学での subjectification と intersubjectivity との連関に関して grammaticalization の問題として考察し、コミュニケーション学会東海支部で発表するとともに研究を深めた。さらに、現象学的研究として McTaggart の The Unreality of Time での時間概念の分析を検討し、それがヘーゲルの観念論的認識論を前提とすることを明らかにし、フッサールの内的時間意識の現象学的分析と対応させて論じた。これは京都言語学コロキウムで発表した。また、その際に認知言語学での時間表現に関する分析を検討し、時間を一つの流れというメタファーによって表現すると、二つの互いに逆の方向の流れとして表象される言語現象を分析し、現象学の立場から同一事態を、視点を変えて記述したものであり、それ

は主観化されているものか客観化されているものであるか、つまり相互主観化されているものであるかの違いであることを明らかにし、時間意識や時間表現の問題を、主観性や相互主観性の問題であることを明らかにした。本研究の成果は、『名古屋大学哲学論集』において、「空間的位置の指示と「主観化」 認知言語学と現象学の交差するところ」と題した論文として公表した。本論文で行った分析は、まずの認識内容の具体的事例を提示し、英語の例文を使って行った。そして、それぞれの認識内容がどのようにして成立するかという問題に取り組んだ。具体的な方法としては、まず認知言語学者ラネカーが彼独自の用語を使用し、そしてイメージ・スキーマという図でもって提示してくれている「概念化」のプロセスを注意深く検討し、特に「参照点」と「ターゲット」、そして「ランドマーク」と「トラジェクター」という基本的な概念 を使用しての分析を、現象学的な立場から、志向性の働きとして解釈し直した。ラネカーが二次元で組み立てているイメージ・スキーマに対して、「心的な」な、主観性の次元の生成を3次元目の座標軸の生成という考えで、独自に展開してみた。また、現象学で言う「志向性」は、われわれの認知世界の内の「直接的スコープ」という<地平>の内部にあるそれぞれの対象に眼差しを向けるという働きを述べているのであり、その意味では、「認識主観」から出発した知覚作用がターゲットである「認識対象」を認知的に捉えるということの意味しているに過ぎないことを示した。また、本研究でのわれわれの発想は、成立している認識内容の具体的提示は、述語文などの言語表現によって行うというものである。そこで、認知言語学の洞察、それぞれの言語表現はそれぞれに対応する概念化の結果であるという原理を受け入れることにより、言語化された限りでの概念化を扱い、それがどのような認知機構を通

じて形成されたかを認知言語学と現象学を使い分析することで得られる洞察が大きいことを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ・ 宮原勇、空間的位置の指示と「主観化」 認知言語学と現象学の交差するところ、名古屋大学哲学論集、査読あり、14号、2015、1-19
- ・ 宮原勇、フッサール初期時間論の基本概念とアポリア(1)、名古屋大学文学部研究論集 哲学篇、査読あり、61号、2015、45-72
- ・ 宮原勇、時間と生をめぐって ハイデガーとフッサール、Heidegger-Forum、査読あり、19号、1-20
- ・ 宮原勇、主観の解体と自己の探求、中部哲学会年報、査読あり、43巻、2012、29-47

〔学会発表〕(計2件)

- ・ 宮原勇、時間と生をめぐって ハイデガーとフッサール、ハイデガー・フォーラム、2014、東洋大学
- ・ 宮原勇、時間に関する現象学的、認知言語学的考察、京都言語学コロキウム、2013、京都大学

〔図書〕(計1件)

- ・ 宮原勇、編著、ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために、世界思想社、2012、328

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮原 勇 (MIYAHARA, Isamu)

研究者番号: 90182039

(2) 研究分担者

宮浦 國江 (MIYAURA, Kunie)

研究者番号: 50275111

(3) 連携研究者

()

研究者番号: